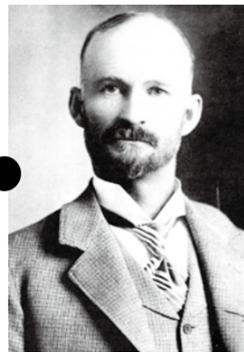


ジョン・モーゼス・ブローニングの仕事



- 数々の名銃を生み出したジョン・ブローニング
- ToyGun at Browning CAWコルト32オート
- 実際に撃ってみました、ジョン・ブローニング・デザインの名銃たち

Cover Photo
Tomoyuki Hasegawa
© WORLD PHOTO PRESS 2020
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

004 第20回 **サイゴン物語**
Saigon Memories
地獄の揺りかご
「ジャングルハンモック」



008 **サイゴン陥落**
SAIGON HAS FALLEN



030 **今、ふたたび**
WORLD of TANKSで遊ぶべし!
戦車の登場と発展 ●菊月俊之
THE WAY OF THE TIGER I ●斉藤直樹

071 **THE グリーンベレー**
GREEN BERET
7th SPECIAL FORCE
GROUP AIRBORNE ●文と写真/DJちゅう

034 **WESTERN ARMS**
COLT NEW AGENT &
WA COMPACT .45 SERIES
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY

078 **Militaria Roundup!**
アメリカ空軍 ヘルメット・バッグ

042 **ランボー** ランボーは何と
戦ってきたのか——。
ラスト・ブラッド

084 **シン・サバゲ三等兵**
出稽古SP! 生存遊戯遊具銃科技集団
「明後日工房」潜入!

046 **東京マルイ新製品リポート&ミニ実銃リポート**
FNX-45 Tactical Black ●by Takeo Ishii

088 **シリーズ 懐かしの名銃**
Walther P38 ●by Ken Nozawa

049 **GLOCK 17 Gen4**

094 **サバゲ三等兵APS部**
第2回ブルズアイマッチ200参戦!
&突発開催「P1グランプリ」結果報告!

054 **SHARK SHOOTER LIVE-FIRE REPORT! 特別篇**
LIMCAT CUSTOM SHOP 訪問記
●by Muneki Samejima

COMBAT FRONT LINE
016 時事特別コラム 新型コロナウイルスが軍事バランスに与えた影響 by 菊池雅之
017 映画5本でゆる〜くたどる「近代アメリカ戦史」 by 狩野健一郎

060 **トイガンニュース**
●WA ベレッタM92FSダイハードタイプ《バトルダメージ》
●WA ベレッタM1934《CBHW Ver.》
●タナカ ルガーP08 8インチHW「エルフルトバージョン」
●タナカ スモルトリボルバー《4インチHW/バージョン3》

092 新製品てんこ盛り COMBAT mono
096 コラム ベトナムを遠く離れて——。文/小倉 徹
098 ツゲチヨリ☆ シューティング武者修行への道
—フォトジェニックなマイガン 編—

ニッポンのちからこぶ ●写真と文/菊池雅之

064 **CG20 Cobra Gold20**
東南アジア最大の軍事演習 PART2

099 レアミリタリーテクノロジー
100 ミリタリーセレクトショップ坂地組
101 ゲームOTT『Fallout76:Wastelanders』
108 PRESENT
109 CIC
110 バックナンバー
111 奥付&次号予告

特集 伝説の天才銃器デザイナー

ジョン・モーゼス・ブローニング の仕事

Photo by Ken NOZAWA

近代銃器の基本を確立した立役者の一人であるジョン・モーゼス・ブローニング。これに異を唱える人はいないと思う。

そう、M1911、「ガバメント」の愛称で知られる米軍の2世代前の制式拳銃だ。

米軍制式拳銃の座を退いたが、未だ軍や警察、

民間（シューティングや護身用などとして）で現役で活躍中の名銃だ。

ブローニングが設計した銃やその生涯、同氏の手掛けた銃の

実銃レポートなどを紹介する大特集!!



数々の名銃を生み出した ジョン・ブローニング

解説 菊月俊之

銃器が誕生したのは14世紀頃だが、それが急速に進化するのには19世紀から20世紀にかけてで、多くの人間がそれに貢献してきた。そして、その中でもひととき光り輝く存在が銃器設計者ジョン・モーゼス・ブローニング(John Moses Brawning/1855~1926年)だ。

彼が設計した銃には“ブローニング”のブランド名が付く事が多く、これをメーカー名と錯覚する向きも。だがブローニングは、自分の設計や製造権を銃器メーカーに売るフリーの銃器設計者だった。本稿ではジョン・ブローニングの経歴と彼が設計した銃を通じ、銃器の巨人の「仕事」を見て行こう。

銃工の息子として誕生

ジョン・モーゼス・ブローニングは1855年1月21日にアメリカ合衆国ユタ州のオグデンで銃工の息子として誕生した。父ジョナサンは子供時代から銃に強い興味を持ち、独学で銃器製作技術を習得。彼は移住を繰り返し、'52年にユタ州オグデンに移住。'54年に結婚し、翌年に長男ジョン・ブローニングが誕生する。ちなみにジョナサンは一夫多妻制のモルモン教徒で、ジョンの母親は2人目の妻だった。ジョナサンは3人(2人説も)の妻を持ち、計5人の息子をもうけている。

ジョンは父ジョナサンの助手、そして生徒で、1878年にフォーリング・ブリーチ式単発ライフルを製作して特許(パテント)を取得。'83年にJ.M.ブローニング兄弟銃器を設立し、この銃を販売した。彼が銃器設計者となるきっかけがこの銃で、製造権を購入したウインチェスターがM1885ライフルとして販売。翌年には同社の依頼で設計したレバーアクション式ライフルが、M1886として製品化される。こうしてブローニングはウインチェスター社との関係を通じ、銃器設計者として才能を開花させていく。

次にブローニングがウインチェスター社の依頼で設計したのがレバーアクション式のM1886ライフルで、遊底の開鎖システムを従来のトグルジョイント式からバーチカル・ロックキング式に変更。より強力な弾丸の使用を可能としている。その後もM1892、M1894、M1895等のレバーアクション式ライフルを設計。M1895は帝政ロシア軍に採用された。またブローニングは.22口径のポンプアクション式ライフルや、単発式ボルトアクション・ライフルを設計する。しかし、ウインチェスター社との関係は契約金の支払いを巡って次第に悪化。1901年に両者の関係は決裂した。

ジョン・モーゼス・ブローニング

自動拳銃、機関銃、ライフル、ショットガン、そして各種弾薬を設計し、銃器界のレオナルド・ダ・ヴィンチとも形容されるジョン・モーゼス・ブローニング(1855~1926年)。ウインチェスター社に始まり、コルト社、そしてベルギーのFN社等の銃器設計を担当。さまざまな傑作銃を生み出した。写真は1886年(31歳当時)に撮影されたもので、ブローニングが銃器デザイナーとして本格的活動を開始した頃に相当。
[Photo: U.S.Army]

ウインチェスターM1892

ウインチェスター社のレバーアクション・ライフルの中で100万挺以上が生産されたベストセラー。M1886の軽量化バージョンで、M1873の後継モデルとして開発された。M1892に関してはウインチェスター社社長が「2ヵ月以内に完成したら1万5,000ドル払う」と言ったのに対し、ブローニングは「30日で完成させるが、その時は2万ドル欲しい」と答え、それを実行したというエピソードが残っている。M1892はM1873と同様に拳銃弾を使用し、銃身長異なるバリエーションが存在。
●ウインチェスターM1892(カービン) DATA:口径: .44-40、.38-40弾など複数、全長95.2cm、銃身長51cm、重量2.7kg、装弾数10発。

コルト社と自動拳銃の開発

ブローニングはさまざまな傑作自動拳銃や機関銃を開発したが、彼が銃の自動化に興味を持ったのは1880年代後半で、'89年にはガス圧利用の作動機構を完成。これを応用し'90年に世界最初のガス圧作動式機関銃を設計した。これに興味を示したのがコルト社で、製造権を購入した同社はこの銃をM1895として販売する。

そしてブローニングはコルト社に自動式拳銃の開発を依頼されるが、彼が開発した作動機構は発射ガス圧の低い拳銃には不向きだった。そこで銃身後座式機構と、ブローバック機構を取り入れ、1897年に自動装填式拳銃を設計して特許を取得する。そしてコルト社はブローニング設計のM1900を発売。しかし当時のアメリカではリボルバー全盛で、売れ行きは芳しくなかった。しかし自動拳銃の将来性を確信する同社は、その後もブローニングに自動拳銃の設計を依頼。1903年には.32口径のコルト・ポケットを発表する。

コルト社はM1910が軍用となる事を望み、サンプルを陸軍に送ったが、評価は否定的だった。だがブローニングとコルト社は開発を続け、M1902ミリタリーを完成させる。しかし陸軍は.38口径を威力不足と判定。そこでブローニングは.45口径自動拳銃の設計に着手。こうして完成したのがM1905で、1906年に開始された陸軍のトライアルに参加。ほかのライバルが続々と脱落していく中、ブローニングは改良を続け、1910年に最終モデルが完成する。これを陸軍がM1911として採用し、'26年に部分的に改修を加えたM1911A1を採用している。



コルト・ポケットM1903

コルト・ポケットMはストライカー式の激発機構を持つ小型の拳銃で、作動方式はM1900の銃身複座式ではなくシングル(ストレート)・ブローバックを採用。また安全装置としてマニュアルセフティのほかにグリップセフティを装備している。1903年から'41年までに計10万5000挺が生産された。
●コルト・ポケットM DATA:口径.32(7.65mm)ACP/.38ACP、全長17.1cm、銃身長9.5cm、装弾数発7発(.38口径)/8発(.32口径)

ブローニングとショットガン

狩猟やスポーツ射撃用に使用されるショットガンだが、ブローニングはこの分野においても非凡な才能を発揮した。ブローニングが最初に設計したショットガンはレバー

アクション式で、これをウインチェスター社がM1887として製品化。同社はさらに彼が設計したポンプアクション式のM1893を販売する。この当時銃の発射薬は黒色火薬だっ

たが、1890年代後半に威力の大きい無煙火薬へ移行。これを受けて開発されたのがM1897で、無煙火薬用にM1893を強化したモデルだった。またブローニングは後述するFN

社でもショットガンの設計を行ない、銃身後座式の5連発ショットガンや、上下2連銃身(オーバー&アンダー)のショットガンは高い評価を受けている。



M1897ショットガン

M1897はポンプアクション式の連発式ショットガンだが、この機構はブローニングの設計ではない。M1897はM1893を無煙火薬用に強化したモデルで、番径12番と16番の2種類が存在。①スタンダード、②スキー&トラップ、③ライアット、④トーナメント、⑤ピジョン、⑥フラッシュ・ガン、そして軍用のトレンチ・ガンのバリエーションが存在。ちなみに軍用はライアット・タイプに着剣装置の付いた金属製ハンドガードを装着したモデル。
●M1897ショットガン(トレンチ・ガン) DATA:番径12番、全長98.6cm、銃身長50.8cm、重量3.6kg、装弾数5発

M1887ショットガン

M1887はアメリカにおける最初の金属薬莢式の連発式ショットガンで、口径は10番と12番の2種類が生産された。装弾数はマガジンに4発、カートリッジ・キャリアーに1発の計5発。重量は9ポンド(約4.08kg)と重かったが、堅牢で信頼性の高い銃と評価されている。
●M1887ショットガン DATA:番径12番&16番、全長112cm、重量4.08kg、装弾数5発

伝説の天才銃器デザイナー
ジョン・モーゼス・ブローニング
の仕事



コルトM1911

“ガバメント”や“GIコルト”の俗称で、2つの世界大戦と朝鮮、ベトナム戦争でアメリカ軍の制式拳銃として使用された傑作。M1911A1はM1911のサイト、トリガー長、グリップセフティとメインスプリング・ハウジング等に改修を加え、1926年に採用されたモデル。強力で信頼性の高い銃で、'85年に9mm口径のM9(ベレッタM92)と交代するまで制式拳銃の座に君臨した。なお、ブローニングはM1911の後に二度と.45口径の自動拳銃を設計しなかったが、これは「.45口径に関してはすべてやりつくした」のが理由だったという。
●コルトM1911A1 DATA:口径.45ACP、全長21.6cm、銃身長12.7cm、重量1,100g、装弾数7発

サイゴン陥落

SAIGON HAS FALLEN

PAVN (People's Army Of Viet Nam) T-54/55 tank

北ベトナム軍が戦車を持ち込んだのは1968年。その後、大量に戦闘に使ったのは1972年のイースター攻勢になる。この戦車はフェンダーなどのディテールが異なり、中国がライセンス生産した59式と思われる。

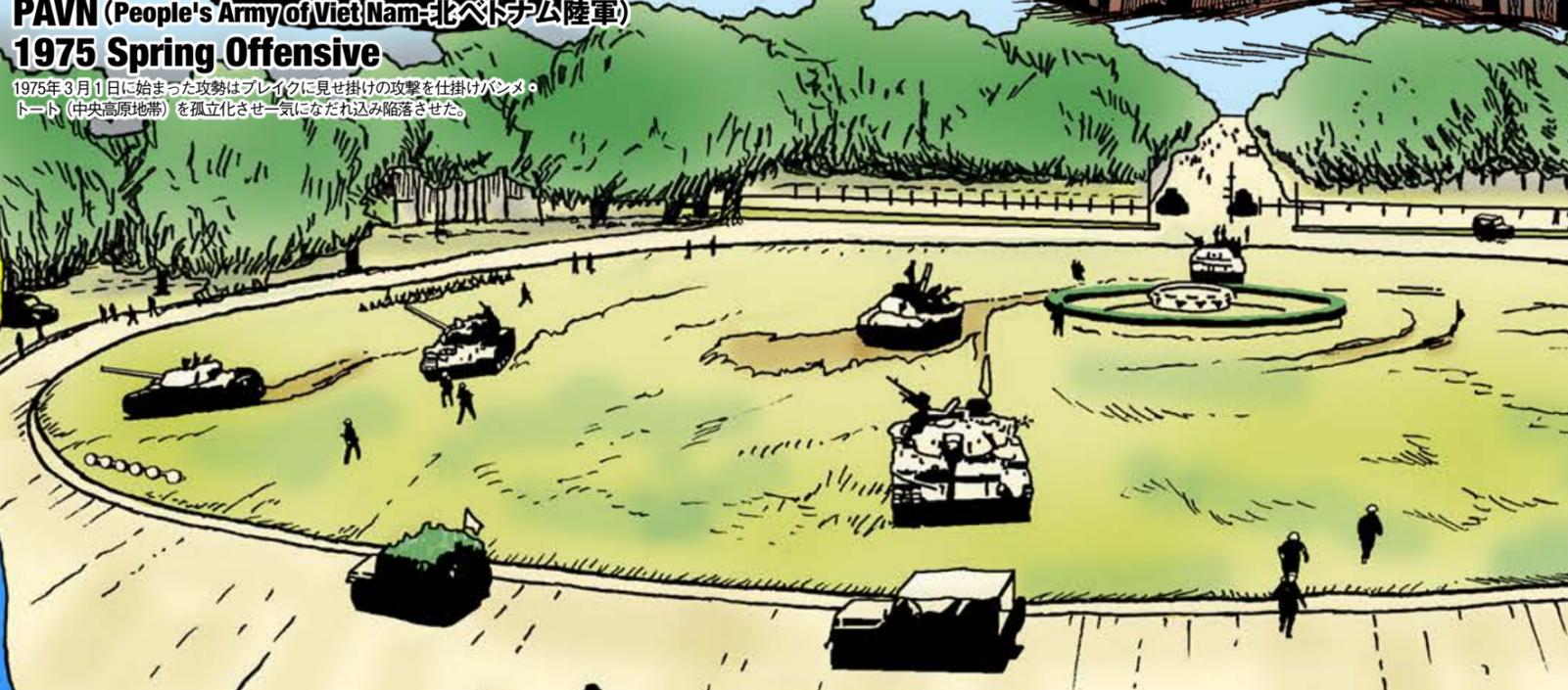
1975年4月30日午後12時15分——戦車部隊を先頭に北ベトナム軍は大統領が住む独立宮殿に突入した。そして、宮殿2階のバルコニーに彼らの旗を掲げてからズオン・バン・ミン大統領の待つ会議室へ向かった。ミンは「我々は政府を委譲する為にお待ちしていました」と告げるも、それに対して兵士は、「あなたがた北ベトナム軍には委譲するものなどなにもない。無条件降伏するだけだ」と、そっけなく答えた。

構成/コンバットマガジン編集部 文とイラスト/M. Kelly



PAVN (People's Army of Viet Nam-北ベトナム陸軍) 1975 Spring Offensive

1975年3月1日に始まった攻勢はブレイクに見せ掛けの攻撃を仕掛けパンム・トート(中央高原地帯)を孤立化させ一気になだれ込み陥落させた。



1975年3月に、フエ、ダナンを攻略した北ベトナム軍の攻撃は、その後も勢いがまったく衰えず、司令部は翌1976年に発動予定の本格的な大攻勢は必要ないと判断した。
4月7日、ヴァン・ティエン・ズン将軍はサイゴンへの玄関口であるスアンロクの上陸を目指す。この作戦のために、隣のビエンホアを結ぶ最大兵站補給道路を遮断する。さらに、国道4号線を遮断することでサイゴンをメコ

デルタから切り離すこと。この作戦を支援する北ベトナム軍は、街の西と南側の封鎖を開始する。ズン将軍は、この一連の行動作戦にコードネームがなかった「ホーチミン作戦」と名付けた。北ベトナム政治局はこれを承認し、彼に「勝利せずには帰還することなかれ」と、伝えた。
4月8日に始まったスアンロクへの攻撃は、今まで同様うまくいくと思

われたのだが、正面突破を試みた北ベトナム軍第3師団、第341師団は南ベトナム軍第18師団、第5師団第8連隊、第3装甲旅団、第81空挺レンジャーグループの2個レンジャー大隊、2個砲兵大隊の抵抗にあって失速し、彼らの激しい戦いぶりは敵のズン将軍でさえ感銘を受けたほどだった。4月14日、将軍はハノイからある指示を受ける。「我々は5月19日(ホーチミンの誕生日)をサイゴンで祝わなければならない」

GAS BLOWBACK FNX-45 TACTICAL BLACK

実用性を研ぎ澄まし
「SOCOMピストルの血脈」を
受け継ぐ。

1996年、米軍初のU.S.SOCOMピストルとして鳴り物入りで採用されたH&K Mk23だが、耐久性を過度に追求し過ぎたためか図体が.45口径ハンドガンとしてはあまりにも大きく、そして重かった。結局その配備は限定的・少数に留まり、むしろMk23は派手な外観やボリューム感、そして話題性がウケ、実用現場よりも映画やゲームといったエンタテインメント界で人気が高まり、民間モデルが売れまくる、という数奇な運命を辿ったのである。ともあれMk23での反省を活かし、次こそは実用的なSOCOMピストルを採用しよう！という目的で、今度はJCPP (=Joint Combat Pistol Program) というトライアルが2000年代初頭に始動した。

全米各地の銃器メーカーが続々と名乗りを挙げたが、最終的に要求仕様を満たす試作品を提出できたのはベルギーFNハースタルのアメリカ法人FNH USAが2005年に開発した「FNP-45」と、ドイツH&K USA社が開発した「HK45」の2

機種のみだった。

しかしこのJCPPトライアルも2006年に無期限延期となってしまう、両社はトライアル用に開発した銃を民間向けに発売し活路を見出す事になった。FNHからはまずスタンダードな「FNP-45」が発売され、後にスライドが小型ダットサイトを直接搭載できるように加工されサプレッサー等のマズルアタッチメントに対応したスレッドド(ネジの切られた)バレルが付いたアップグレード版「FNX-45タクティカル」が登場。特殊部隊仕様に研ぎ澄まされたスタイリングは、まさに「SOCOMピストルの血脈」そのものだ。

スライド後方上部のプレートはネジ2本でピッタリと嵌まっている。サプレッサーおよびマイクロダットサイト対応の背高リアサイトは作動性を優先した樹脂製。この辺りの割り切りもまた東京マルイの真骨頂。

大振りなスライドが「グワッ！」とロングストローク作動する様子は迫力満点！「SOCOMピストルの血脈を継ぐ者」に相応しい堂々たる風格だ。

- GAS BLOW BACK FNX-45
Tactical Black**
- 全長:220mm
 - インナーバレル長:113mm
 - 重量:830g
 - 装弾数:29+1発
 - パワーソース:HFC134aガス、ノンフロンガスパワー
 - 作動方式:ガスブローバックセミオート
 - 19,580円

実銃では.45ACP弾15発を収納できる大型マガジン。ガス効率の高い亜鉛ダイカスト一体成型タイプだが、薄い鉄板の外装と見紛うほどの造形と仕上げが美事！

●FNX-45タクティカル用スベアマガジン 3,278円

滑らか、かつ力強いショートリコイル・アクションを司るのがデュアル構造アウターバレルとインナーバレル・ブロックが組み合う部分の構造だ。まさに東京マルイ技術陣の弛まざる努力と創意工夫の結晶！

LIMCAT CUSTOM SHOP

訪問記



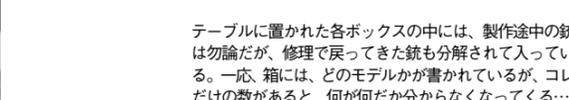
この2挺は、僕の愛用するUSPSA/IPSC用のオープン・ガンだ。シルバーの方は、最新のスチール製グリップが装着され、銃の重量はマガジン抜きで1500gを超える。弾の装填されたマガジンを合わせると2kg弱となり、銃の重さでリコイルがかなり抑えられる。ブラックの方は、CNCでスライドのテクスチャーなどが仕上げられており、最新のデザインだ。こちらは、バックアップで、グリップは通常のプラスチック製のSTIグリップが付いている。どちらもスライドとバレルは、何度か交換されているが、リムキャットの生涯保証のおかげで6年以上使うことが出来ている。



少し間が空いてしまったが、今月は昨年夏に訪問したリムキャット・カスタムのショップ訪問記の続編をお届け！世界的にも有名な競技用レース・ガン「リムキャット・カスタム」が製作される現場の様子と他では聞けないリアルなレース・ガンの世界の話を実役シューターならではの目線でレポート。ショップの様子は写真とキャプションで細かく解説しているので、こちらも要チェック！



ショップの裏から入ると左側は、ミリングマシン（フライス盤）が所狭しに並んでいる。



テーブルに置かれた各ボックスの中には、製作途中の銃は勿論だが、修理で戻ってきた銃も分解されて入っている。一応、箱には、どのモデルかが書かれているが、コレだけの数があると、何が何だか分からなくなってくる…。



こちらの状態は、各パーツがある程度揃ったところだ。これから各パーツをすり合わせていく段階だ。

実銃カスタム・レース・ガンのリアル事情

ガンスミスにオーダーして制作してもらったカスタム・レース・ガンだが、新品でオーダーする場合、5000ドル〜9000ドルの（約55万円〜99万円）費用が掛かる。ちなみに、日本でも有名なSTIIは、完全なガンスミス制作ではなく、ファクトリー・カスタム品。カタログに載っているモデルとなり、多少は安い（40万円程度）。対して高級路線のInfinity SVは、各自の好みでオーダーし、最終的にはガンスミスが手作業で仕上げしていく。使用されるパーツもCNCで製作さ

れた高級品。近年は、価格がドンドン上がっており、日本円で100万円以上も珍しくない…。個人規模のガンスミス、ガンビルダーだと市販されているカスタム・パーツを使用して、スライド、バレル、フレーム、各パーツのフィッティング、ブレンディングを行なう。この場合も使用するパーツにより費用は前後するが、安い場合でも60万円程度のコストが掛かる。多額の費用が掛かるレース・ガンの世界だが、それだけの費用を掛けても銃の寿命そのものは長いわけではない…。銃の寿命は、使用する弾薬の威力と弾頭の種類により大きく異なるが、USPSA/IPSC用の威力

の強い弾薬を撃つオープン・ガンであれば、バレルの寿命は6万発前後。スライドは9万発程度でクラックが入る。スチールチャレンジでは、威力の弱い「マイナー・ロード」を撃つことから、それに使う「スチールガン」は、これより大幅に多い弾数を同じスライド、バレルで撃つことができる。とは言え、競技で勝つことを真剣に考えて練習するシューターは、多くの人が年間で3万〜4万発、完全なプロともなれば、6万発は撃っている。つまり、シリアスなシューターであれば、銃の寿命は2年〜3年程度。どんな銃であれ、バレルの寿命によるアキュラシー低下、

スライドヘクラックが入り、交換をする必要に迫られる。そして、ここが重要な点だが、多くの場合、銃を制作したガンスミス、ガンビルダーは、スポンサーしているシューターは特別としても大抵の場合、銃の修理（バレル交換、スライド交換等）を無料で行なうことはない。バレルの交換にかかる費用は、バレル本体は300ドル程度。工賃が200ドルかそれ以上。トータル日本円で6万円弱の費用が掛かる。またスライドの交換費用も10万円前後掛かることが多い。カスタム・レース・ガンで真剣に競技に取り組むのは、物凄いお金とそれに対する覚悟、情熱が必要なのだ。

フレームが箱に入っていないが、ここまでくると各部のフィッティングがだまかに終わり、仮組ができる状態になっている。



数年前から導入されたCNCマシンの作業場。既に4台のマシンがフル稼働している。CNCマシンを導入すると、各種パーツをドンドン生産する必要があるのだ。



CNCマシンを開いた状態。

